

地域、環境を結ぶ造形表現

—ちいさな黄色い手紙プロジェクト実践報告—

会津大学短期大学部 幼児教育学科
葉山 亮三

I. はじめに

ちいさな黄色い手紙プロジェクトは 2017 年豊橋創造大学短期大学部加藤克俊氏と連携して行った復興支援事業である。愛知県渥美半島は菜の花に溢れ、例年 1 月から菜の花祭りを行うなど春の訪れをいち早く教えている。NPO 法人チェルノブイリ救援・中部はチェルノブイリでの原子力発電所の事故後、チェルノブイリへの支援を行ってきた。放射性物質に対する土壌効果の期待から、この愛知県の菜の花はウクライナに送られ交流を続けてきた。この「菜の花プロジェクト」は放射性物質が移行していない食用油やディーゼル油、メタンガスを生成するものでした。また、東日本大震災以降福島県南相馬市への菜の花による支援を行っている。福島、チェルノブイリはともに原子力発電所の事故が起こった場所として、知られている。この 2 箇所を結ぶ起因は、この事故の共通点にある。今回の本プロジェクトは、愛知、福島、ウクライナの 3 地域を、菜の花をきっかけとした造形作品で結ぶことを期し、行ったものである。事故からではなく、菜の花と、子どもたちの作品が交流の手段となることを望む。また造形作品は時に、子どもの姿を伝える写し鏡のようなものである。各地域、時代の子どもの作品を比較することで、子どもたちの様子を比較検証することを目指して行った。

II. 愛知県での取り組み、展示

平成 29 年春、愛知県豊橋市幼保連携型こども園明照保育園の子どもたちは、愛知県渥美半島の菜の花畑を観察しました。その後、園に帰り、3 歳、4 歳、5 歳のクラスそれぞれで絵を制作した。

図 1、3 歳児の作品は大きな紙（約 2m×5m）に描かれた共同制作で、非常に運動的な描画となった。共同で行う造形の長所としてのダイナミズムが溢れる作品である。今回のモチーフは「菜の花」ではなく「菜の花畑」である。詳細な描画を除いた、このダイナミックな表現は広がる菜の花畑の様子を子どもらしく表現している。絵の具を用い

た表現の上に、花、天道虫、蝶の装飾を加えている。生き物が飛び交う姿が加わることで、画面をより運動的に仕上げている。また、最後にこのような装飾を加えることで、完成した、できたという子どもの達成感を引き出しやすいものである。

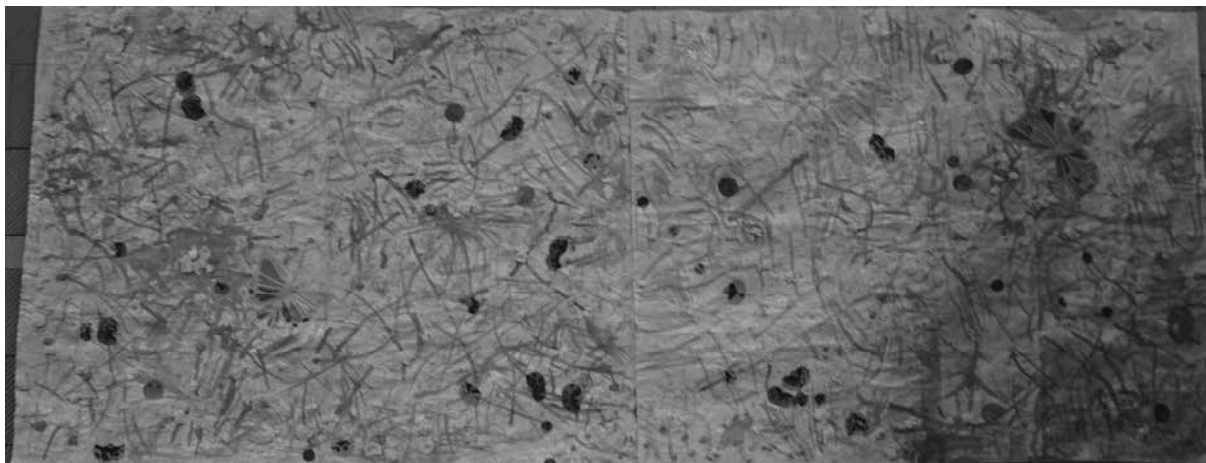


図 1 3 歳児の描画表現

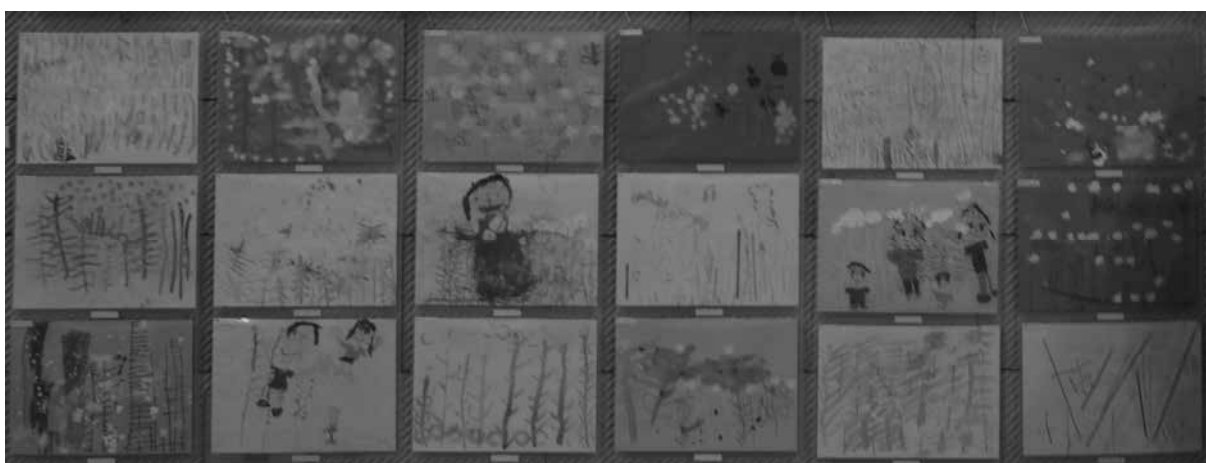


図 2 4 歳児の描画表現

図 2、4 歳児の表現は四つ切画用紙に個人でそれぞれの描画表現を行っている。背景となる画用紙に人物などを描き、菜の花を透明なビニールシートに描き、上から重ねることで、描画の途中で絵が濁らないように配慮されている。菜の花は菜の花、背景は観察したときや、描画をしているそのときの気持ちがモチーフに反映されている。絵の具を使うと色が濁ることがあり、低年齢には難しいことが多いが、支持体を画用紙とビニールシートに分けることで描き分けを可能としている。このように発達段階に合わせて、指導法や、用意する材料、環境を工夫することで、子どもの表現を形に残すことができる。



図3 5歳児の描画表現

図3、5歳児の作品は4歳児同様に四つ切画用紙を使った個人制作である。作品を見ると、菜の花のまわりに、その環境を描き加えている。特に、菜の花畑に飛び交う虫がよく描かれている。ここで注目するのはこの虫が飛び交う方向である。上に向かうことが多いが、1枚の絵の中で、虫が飛んでいく方向がそろっていることが多い。この年齢において、「飛んでいく」というイメージは、様々な方向から描く「飛び交う」まで描ききれていない。また、左下2つ目の作品に注目すると、蝶の羽を前と後ろを描き分けているため、飛行機のような形になっている。これは全体像ではなく、蝶には大きな羽と、後ろの羽がある、という子どもの素直な記憶から描かれている。ここで描かれている作品を注視することで、子どもがどのように対象に注目しているのかを理解することができる。

平成29年6月19日から7月23日、豊橋創造大学にてこれらの作品にチェルノブイリ救援・中部からお借りした、チェルノブイリの子どもたちの作品を同時展示した。チェルノブイリの子どもたちの作品は事故から5年から10年後に描かれたものである。愛知の菜の花とチェルノブイリが作品によってこの展示を「ちいさな黄色い手紙展」と称した。菜の花をちいさな黄色い手紙とすることで、地域をめぐる交流となるべく端を発した。

Ⅲ. 福島県大熊町の子どもたちとの連携

愛知県での展示後、作品を福島に運び、11月4日から23日にかけて福島県立博物館で展示を行った。本展示には、愛知の明照保育園、チェルノブイリ救援・中部の作品に加え、大熊町教育委員会の協力の下、大熊町の小中学生の作品を展示した。ちいさな黄色い手紙展の福島展である。

大熊町は事故の影響から、事故后会津若松市に町が移動している。事故からの年数を考えると、チェルノブイリ救援・中部が所蔵するチェルノブイリの子どもたちの作品と、事故後の経過年数が類似する。大熊町の子どもの作品は授業で取り組んだ日常の活動の中での作品である。これらの作品を比較検証する。



図4 チェルノブイリの子どもたちの作品



図5 チェルノブイリの子どもたちの作品

図4、図5はともにチェルノブイリの子どもたちの作品である。使われている色について、全体的に彩度が低い傾向にある。これは後に現地に行くことで分かったことではあるが、ウクライナの教育現場で使われている絵の具の基本色が、日本と異なること、パレットをあまり用いず着色することから色が暗くなりやすい傾向はあるようであった。また描かれている内容は事故に対して、または事故後の様子について、非常にネガティブな表現が見られる。事故の重大さを忘れないためにも、このような表現が求められたようである。図4の右列の作品、特に図5の作品を見ると作品の描画量が少ない。一概には言えないが、作品の描画量は、子どもの積極性を知ることができる。対象が重なること、画面に大きく描く、画面に多くのものを描く、といった行為は子どもが伝えたい事柄の強さ、多さを表す。図5の作品は13歳の子ども作品である。年齢から考えると非常に積極性が弱い。このことは広河氏の著書「チェルノブイリ報告」(1991)からも類似事例が述べられている。



図6 大熊町の子どもたちの作品

図6は大熊町の小学生の作品である。どれも四つ切が用紙に描かれている。表現の範囲として、手がよく動いているのが読み取れる。チェルノブイリの子どもたちに比べると、表現の積極性が強い。これは学習環境が大きく作用されると考えられるが、大熊町の子どもたちは表現に抵抗がなく、伸びやかである。事故の影響ではなく、学習環境が子どもたちの表現に影響を表していることが伝わる。

IV. ウクライナでの展示

福島県立博物館での展示後、愛知、福島の子どもの作品をウクライナジトーミル

州、ジトーミル青少年芸術センターに運び、現在のウクライナの子どもたちの作品とともに展示した。ちいさな黄色い手紙展のウクライナ展である。12月12日から始まった本展は平成30年3月末までを会期としている。ジトーミル州はチェルノブイリの事故後、避難の拠点となった町である。ジトーミル青少年芸術センターはダンス、音楽、美術を学ぶ子どもたちが通う文化施設である。



図7 ジトーミル州の子どもたちの作品



図8



図9

図7、8、9の作品はウクライナの現在の子どもたちが描いた作品である。事故後に描かれた作品と比較すると、使われている色の彩度が上がっていることがわかる。また、描画量も多く、非常に積極的な表現が見て取れる。特に、図8の作品はチェルノブイリの事故をモチーフとしている。事故後に描かれた作品からは、事故の凄惨さを伝えるような内容が描かれていたことに対し、この作品は立ち向かうような鳥、太陽が象徴的である。同じ場所であっても、子どもたちの今の状態は、事故を悲観的に捉えるというよりは、今後を見据えている。また、表現の欲求は、どの場に置いても高めることができ

ることがわかる。

V. 絵巻物のワークショップ

ちいさな黄色い手紙展に合わせて、愛知、福島、ウクライナにてワークショップを行った。「つないで描く絵巻物」と称し、愛知の明照保育園、福島県大熊町、会津若松市の子どもたち、ウクライナの6歳から8歳の子どもたちを対象に、菜の花畑を描くものである。絵巻物は日本の文化であるとともに、つなげることで半永久的に表現を継続できる。作品を通じた交流の手段として、これを用いることとした。



図 10 ウクライナでのワークショップ



図 11 福島県立博物館でのワークショップ

図 10 はウクライナでのワークショップの様子である。菜の花を描くとしたときに、個々が自分の描画空間を定めて描いている。これは日本の子どもからはあまり考えられないことであった。図 11 の作品は左手の作品が愛知で描かれた幼児の作品、右手は福島の幼児から小学生が制作したものである。空間を分けることなく、このように連続して描かれている。ウクライナの子どもの造形指導について、現地教員に伺ったところ、共同制作はほとんど行うことがなく、基本的には個人での制作となるということであった。図 1 に示したような共同制作は、遊びの要素も取り入れて日本では行われている活動である。このような表現体験がないと、子どもの表現にこのような変化が現れることがわかった。



図 12

その後共同制作としやすいように、導入法を変え、実施したワークショップでは図 12 のようになった。図 10 では、まず子どもたちにそれぞれの菜の花畑の様子、それからその場所の様子、生き物の様子をイメージしてから描くように留意した。それに対し図 12 では、まず菜の花を描く、たくさん描いて菜の花畑にすることを前半の活動とし、後半に生き物や環境を描き加えた。このように子どもたちの様子に合わせて、指導法の留意を変えることで、子どもたちの表現を多用にすることがわかった。

VI. 今後の展望

今回のプロジェクトを通して、造形表現を手段として交流することはウクライナの出の活動が現地のマスメディア（TV4 社、ラジオ 1 社、新聞 1 社）に取り上げられるなど、非常に注目と歓迎を受けた。作品展を通し、作品の場所、時代の変化を比較し理解

することができた。また絵巻物のワークショップを通して、実際に現地の子どもたちと制作を共にすることで、何を表現したいのか、どう表現するのかを知ることができた。特に絵巻物のワークショップは「つながる」ことをキーワードとしている。ここで終わるのではなく、今後も継続することで、各地の子どもたちの作品を見せ合い、刺激しあう交流の手段としていきたいと考えている。

引用・参考文献

加藤克俊 (2017)『ちいさな黄色い手紙プロジェクト』豊橋創造大学
広河隆一 (1991)『チェルノブイリ報告』岩波新